

秀賞

百点満点

青森県青森市立浦町中学校

3年 高橋 佑佳

私は、応援委員会の委員長を務めています。私たち応援委員会の役割は、学校の行事である、中体連壮行式で、中体連に出場する選手団を激励することです。壮行式では、中体連に出場しない応援団が心を一つにして、選手団へエールを贈ります。その中で、応援委員会は応援生徒の先頭に立ち、演舞を披露しながら、力強いエールを届ける役目を担っています。

しかし、壮行式の練習が始まると、私は委員長でありながら、この行事が嫌いになっていきました。応援委員会内の練習では、自分が見本となって演舞の振りを、後輩に分かりやすく教えなければなりませんでした。その期間は、わずか1週間しかなく、限られた時間で正確に伝えなければならず、大きなプレッシャーを感じていました。

さらに、クラスでエールの声出しを覚えさせることも、私の役目でした。自分から率先して大きな声を出し、何度も繰り返して練習しました。また、激励の言葉を暗記し、応援団への事前指導で使う原稿も作成しなければなりませんでした。

日がたつにつれて、壮行式に対する不安は大きくなっていきました。練習の責任感と学校のストレスが重なり、心に大きな重圧がのしかかりました。次第に気持ちが押しつぶされそうになり、追いつめられていきました。

そして、いよいよ壮行式本番の日がやってきました。応援委員会の出番が近づくにつれて、不安の波が押し寄せてきて、部活動ごとの発表を見ている間も、頭の中は失敗のイメージや激励の言葉の確認でいっぱいでした。背筋はピンと張り詰め、心も体も緊張で張り詰めているように感じました。

しかし、いざ私たちの出番が回ってくると、不思議なことに頭がとても軽くなりました。全校生徒の視線が私に集まった瞬間、ふわふわとした不思議な感覚に包まれ、なぜか高揚感を覚えました。視界がクリアになり、目に映るもの全てが、明るいフィルターにかかったように見えてきました。脳が焼き切れるほど練習した激励の言葉も、喉が枯れるまで練習した演舞も、自然と体の中からあふれ出るように表現できました。百点満点のエールを届けることができたのです。

壮行式が終わってからは、友達や先生、部活動の仲間、そして家族からたくさん褒められました。その瞬間、初めて心の底から「壮行式の準備、苦労しな

がらも頑張っただけでよかった」と感じる事ができました。今までの努力を壮行式で発揮できた達成感は、言葉にできないほどうれしかったです。

この経験は、私に大きな自信を与えてくれました。自分に与えられた役目から逃げずに責任を果たすこと、そして苦しい気持ちと向き合いながら最後までやり遂げるからこそが本当の『挑戦』なのだと学びました。

挑戦の最中はつらく、途中で投げ出したくなることもあります。しかし、それを乗り越えたあとには、確実に一歩成長した自分がいます。挑戦は、自分の可能性を広げるきっかけになるものだと思います。

最初は、不安や恐れのお気持ちの方が大きいかもしれません。それでも、その壁を越えた先には、今まで見たことのない新しい景色が広がっていると感じました。

一度挑戦してみることで次の挑戦への意欲や自信が生まれてきます。挑戦を繰り返す中で忍耐力や計画力など、さまざまな力が身につきます。そしてそれは、人生の選択肢や視野を広げ、自分の人生をより豊かにしてくれるのだと気づきました。

私は、これから、どんな困難にも前向きに立ち向かっていきたいと思っています。そして、「挑戦とは、誰かに勝つことではなく、自分に負けないことだ」という心構えが、挑戦するときに必要なのだと思いました。